# 〈贈る言葉〉・清田文武先生と森鷗外

石坂妙子

平成十七年三月、清田文武先生が新潟大学（教授・教育人間科学部）を退かれることになりました。昭和四十六年八月、先生ご自身の母校でもある新潟大学教育学部へ赴任されてより、実に三十三年の長きにわたり研究と教育に邁進して来られました。学生たちと談笑されていたよく透るお声が九階の廊下に響くことがなくなってしまうのか、と想像するたびに寂しさが襲ってきます。殊に、学生時代から先生のお教えを賜わり、また教員として赴任してからも様々にご教示をいただいてきた身としては、深い感謝と底深い喪失感とが湧き起こってくるの禁じえません。

清田先生は申すまでもなく森鷗外の大研究家でいらっしゃいます。鷗外研究の第一人者として、そのご高名は学内外に響き渡っているところです。平成三年（一九九一）には『鷗外文芸の研究　中年期篇』（一月、有精堂刊）、『鷗外文芸の研究　青年期篇』（十月、有精堂刊）を上梓され、翌平成四年十一月、その両大著により東北大学から博士（文学）の学位を授与されました。学界に向けて常に刺激的な鷗外論を発信され続けると同時に、学生に向かっては、文芸作品の「ことば」一つひとつに深遠な意味が込められており、細部の重要性が見えてきたときこそ大きな文芸論への展望が拓ける、という研究の極意を説き続けておられました。そのような教育へのご貢献は、日本の国内にはとどまりません。平成十年七月には東北師範大学（中国）客員教授、平成十五年九月には青島大学（中国）客員教授となられ、現在に至るまで中国の学生に日本近代文芸を講じる機会をとても大事になさっているのです。先生の魅力的なご講義に感銘を受けて近代文芸の研究に目覚めた学生は、日本・中国ともに決して少なくはありませんでした。その意味で、清田先生は、新潟大学の「顔」ともいうべき役割を担っていらした、というべきでしょう。

教育人間科学部には、「国語国文学会」という組織があり機関誌『新大国語』を年一回発行しています（この小文もそこに掲載されます）。このように改めて記すのには訳があります。昭和四十七年八月に「新潟大学教育学部国語国文学会」という名称で立ち上げられたこの組織の創設者が、外ならぬ

清田先生だったのです。初代事務局長として、教育学部国語科の教員・卒業生・在校生を中心とする会員を束ね、研究・教育の推進を目指して働かれたのが赴任間もない若き先生でした。会員の研究に対する熱意をすくい上げ、定期的な研究発表の場と論文掲載の機会を確保することに大きく貢献してきた「国語国文学会」と『新大国語』は、既に三十年を越える歴史を持つことになりました。『新大国語』の知名度も年々高くなってきています。「国語国文学会」を中心とする同窓の絆は、年ごとに更新され確認されていきます。国語科にとって大事なひとつの財産ともいえる組織と機関誌とを私たちに残して下さった先生のご恩は、決して忘れることができません。

先生は、在職中に鷗外研究集大成の著書を出したい、と口癖のように言っていらっしゃいました。どのような話柄よりも、鷗外文芸のことを語っておいでのときが一番饒舌で楽しげな表情をなさっていました。これは、周りの人間みなが共感する清田先生評でしょう。何があろうと鷗外とその文芸世界があれば、先生の人生は輝きを失わないのです。研究対象とのこのように幸福な融合は外にあるでしょうか。研究生活に入られた頃と変わらぬ熱意と愛情を鷗外研究に傾けてやむことのない先生には、ご退職後の生活はまた一層の深さと広がりのある新天地との遭遇が待っていることでしょう。世俗の煩雑さに煩わされることなく、これからは巨大な森鷗外との対話に専心され、究められた鷗外文芸の精髄をまた改めて世に問い、学界に寄与してくださる日を待ち望んでおります。

申すまでもなく、現在の大学が置かれた社会的状況はより厳しくなっており、研究・教育環境にもさまざまに変革が迫られております。どうか、先生にはご退職後もこの大学の将来をお見守りくださいまして、大局を見据えたうえでのご助言など賜わりたく存じます。

清田先生、長い間本当に有り難うございました。お健やかなご研究生活と末永いご多幸とを、一同、心より祈念申し上げます。

（新潟大学教育人間科学部）